

夏目漱石・作 我が輩は猫である より抜粋

我に帰ったときは水の上に浮いている。苦しいから爪でもって矢鱈に搔いたが、搔けるものは水ばかりで、搔くとすぐもぐってしまう。仕方がないから後足で飛び上っておいて、前足で搔いたら、がりと音がしてわずかに手応があった。ようやく頭だけ浮くからどこだろうと見廻わすと、吾輩は大きな甕の中に落ちている。この甕は夏まで水葵と称する水草が茂っていたがその後烏の勘公が来て葵を食い尽した上に行水を使う。行水を使えば水が減る。減れば来なくなる。近来は大分減って烏が見えないと先刻思ったが、吾輩自身が烏の代りにこんな所で行水を使おうなどとは思ひも寄らなかつた。

水から縁までは四寸余もある。足をのばしても届かない。飛び上っても出られない。呑気にしていれば沈むばかりだ。もがけばがりがりとして甕に爪があたるのみで、あたった時は、少し浮く気味だが、すべてばたちまちぐっともぐる。もぐれば苦しいから、すぐがりがりやる。そのうちからだが疲れてくる。

気は焦るが、足はさほど利かなくなる。ついにはもぐるために甕を搔くのか、搔くためにもぐるのか、自分でも分りにくくなった。

その時苦しいながら、こう考えた。こんな呵責に逢うのはつまり甕から上へあがりたいたばかりの願である。あがりたいたのは山々であるが上がれないのは知れ切っている。吾輩の足は三寸に足らぬ。よし水の面からだが浮いて、浮いた所から思う存分前足をのばしたって五寸にあまる甕の縁に爪のかけりようがない。甕のふちに爪のかけりようがなければいくらも搔いても、あせっても、百年の間身を粉にしても出られっこない。出られないと分り切っているものをしようとするのは無理だ。無理を通そうとするから苦しいのだ。つまらない。自ら求めて苦しんで、自ら好んで拷問に罹っているのは馬鹿気ている。「もうよそう。勝手にするがいい。がりがりはこれぎりご免蒙るよ」と、前足も、後足も、頭も尾も自然の力に任せて抵抗しない事にした。

次第に楽になってくる。苦しいのだからありがたいのだから見当がつかない。水の中にいるのだから、座敷

の上にいるのだから、判然しない。どこにどうしていても差支えはない。ただ楽である。否楽そのものすらも感じ得ない。日月を切り落とし、天地を粉壜して不可思議の太平に入る。吾輩は死ぬ。死んでこの太平を得る。太平は死ななければ得られぬ。南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏。ありがたいありがたい。

入力：柴田卓治

校正：渡部峰子（一）、おのしげひこ（二、五）、田尻幹二（三）、高橋真也（四、七、八、十、十一）、しず（六）、瀬戸さえ子（九）

1999年9月17日公開 2018年2月5日修正

青空文庫作成ファイル：このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。